

光信公ゆかりの地紀行9

天童山 知られざる鱈ヶ沢城



津軽藩始祖とされる戦国武将・大浦光信から数えて5代目、大浦為信（後の津軽為信）によって津軽統一が果たされます。光信の居城であった種里城は「津軽藩発祥の地」として知られていますが、実は鱈ヶ沢町にはもう一つ、江戸時代にも津軽氏の城があったのが存在でしょうか。

今回のゆかりの地紀行では、その後の津軽藩と鱈ヶ沢町との歴史をひも解きながら、知られざる「鱈ヶ沢城」の謎に迫ります。

■津軽信隆と鱈ヶ沢

2代藩主信枚の後、長男の信義が3



絵図に描かれた鱈ヶ沢城（函館市中央図書館蔵）



現在の天童山（鱈ヶ沢城跡）

代藩主になりますが、二男信英は後に黒石津軽家として分家し、三男信隆は家老として共に津軽藩を支えました（1月号掲載の系図参照）。この津軽信隆―通称百助こそが、鱈ヶ沢城の主だった人物です。

信隆は、寛永12年（1635）、鱈ヶ沢港を見下ろす天童山に鱈ヶ沢城（長松館とも言う）を築きました。当時鱈ヶ沢は日本海側で最も重要な港であり、藩主の弟でもある信隆が、特に選ばれてその守りを任されたと考えられます。後に津軽藩の御用港として発展していく鱈ヶ沢ですが、津軽信隆が入った江戸時代初期の頃には、すでに



津軽信隆の墓（弘前市長勝寺）

その基礎ができあがっていたと言っても良いでしょう。

正保2年（1645）、信隆は鱈ヶ沢から弘前に戻りました。3代・4代藩主に代々家老として仕え、万治元年（1658）に39歳で死去。墓は津軽家菩提寺の長勝寺にあります。

■天童山と鱈ヶ沢城

天童山は、南北朝時代、山形県天童城にいた北畠天童丸が、鱈ヶ沢に城を構えたとも伝えられる場所です。信隆が築いた、鱈ヶ沢城は、当時の記録によると東西約130m、南北約30mの広さがあり、城門は新町に向けられています。小夜の「堀切沢（ホリケの沢）」は、城の西側を守るための堀だったとされています。

現在天童山は公園となっており、城があった当時の面影は残っていません。昔は、一丁目の大沢醸造店のすぐ裏ま



新地稲荷神社の牡丹紋幕
鱈ヶ沢城主子孫・津軽操らの名が記されている

で天童山でしたが、昭和7年（1932）に始まった鱈ヶ沢築港工事によって山が半分くらい切り崩されてしまいました。かつて山だった跡地は、今は住宅地に姿を変えています。

■新地稲荷神社

新地稲荷神社は、津軽信隆が鱈ヶ沢城を引きはらう際、城内にあった館神社（城の守り神）を新地町に移して建立した神社とされています。神社には、昭和8年、信隆の子孫である津軽操、黒石津軽家13代益男らによって奉納された津軽家「杏葉牡丹紋」の家紋幕が残されており、津軽家一門との歴史の縁を今に伝えています。

静かに目を閉じ、天童山を吹きぬける「歴史の風」を肌感じながら、弘前・黒石へとつながる悠久の歴史に思いをはせずにはいられません。

（町学芸員 中田）